

北斎の描いた継飛脚



この錦絵は、天保6年（1835）に出版された葛飾北斎筆「富嶽百景」に掲載されている「暁の富士」の場面を、大正時代に模刻彩色したもので、幕府公用の継飛脚が描かれています。

江戸時代になると、幕府によって街道や宿場が整備され、書状や荷物を運ぶ飛脚制度が発達しましたが、飛脚には、継飛脚、大名飛脚、町飛脚などがありました。

この継飛脚は幕府専用の通信制度で、御状箱、御用物と呼ばれる幕府公用の書状や荷物を、老中、京都所司代、大坂城代などの証文により宿場間を駅伝競走のように継送するシステムです。

継飛脚は各宿場の問屋が担当し、御状箱を担いだ前の宿の人足が到着すると、すぐさま昼夜を問わず次の宿まで継ぎ送りました。最急用の場合、江戸・大坂間を約3日で届けたようです。創業期の郵便輸送は、この継飛脚のシステムを再利用して行われました。

（表紙解説）

東海道五拾三次之内 神奈川 台之景

神奈川宿の台町あたりの風景が描かれている。上り坂となった景色のよい道の片側には茶屋が軒を並べ、旅人の袖を引く客引きの姿が見受けられる。台町は海に面した崖の上であり、ここからの眺望は素晴らしく、本牧から東京湾を挟んで房総半島まで見渡すことができた。

この図は後版で、初版とは茶屋の屋根や小船に相違がある。